

## VI-1

## 多発性骨髓腫 184 例の臨床的解析 (新潟県多施設共同研究)

阿部 崇<sup>1,2</sup>、瀧澤 淳<sup>1,2</sup>、高井和江<sup>2</sup>、小山 覚<sup>2</sup>、関 義信<sup>2</sup>、永井孝一<sup>2</sup>、橋本誠雄<sup>2</sup>、  
斉藤弘行<sup>2</sup>、野本信彦<sup>2</sup>、小林 政<sup>2</sup>、丸山聡一<sup>2</sup>、新國公司<sup>2</sup>、桃井明仁<sup>1, 2</sup>、青木定夫<sup>1,2</sup>、  
相澤義房<sup>1</sup>

新潟大学大学院医歯学総合研究科 血液学分野<sup>1</sup>、新潟骨髓腫研究会<sup>2</sup>

【目的】新潟県内における骨髓腫の臨床像やこれまでの治療実態を把握する目的で後方視的に症例の調査を行った。【方法】新潟大学第一内科および県内関連施設で 2001 年 1 月から 2005 年 12 月に治療を行った新規 MM 症例全例を対象とした。生存解析には Kaplan-Meier 法を用いた。多変量解析は Cox 比例ハザードモデルを用いて行った。【結果】184 例が登録された。年齢は 41-87 歳(中央値 71 歳)、男性 86 例、女性 98 例。M 蛋白の型は IgG 型:108 例(60%)、IgA 型:36 例(20%)、BJ 型:29 例(16%)。D&S 病期は 1 期:15 例(8%)、2 期:67 例(37%)、3 期:99 例(55%)。ISS 病期は 1 期:56 例(40%)、2 期:42 例(30%)、3 期:43 例(30%)。初回化学療法は VMMD/ROAD:64 例(35%)、MP/CP/M/C:40 例(22%)、VAD:31 例(17%)、MCNU-VMP:23 例(13%)、VMCP:17 例(9%)、他。upfront APBSCT は 17 例(9%)に行われた。観察期間 0-66 月(中央値 22 月)における全例の生存期間中央値(MST)は 45 月、全生存率(OS)39.7%。M 蛋白別に OS を比較すると BJ 型(MST:18 月)は IgG 型(MST:50 月)や IgA 型(MST:54 月)に比べ予後不良であった。ISS 病期 1 期は 2 期 3 期に比べ予後良好であった。APBSCT を併用した症例は化学療法単独群に比べ予後良好であった。APBSCT 非施行例で初回化学療法別に OS を比較すると、VAD 群(MST:12 月)は他の化学療法群(MST:34-51 月)に比べ有意に予後不良であった。OS における予後不良因子は、多変量解析において、BJ 型、ISS 病期 2/3 であった。【結論】ISS 病期は予後の層別化に有用と考えられた。VAD 療法は、APBSCT が行なわれない場合は予後不良であり、初期治療として不相当と考えられた。